

村松孝一研究（1）ベーム式フルート製作の始まり ——明治期から昭和初期における国内の楽器情况——

A study on Koichi Muramatsu (1) The Beginning of the Boehm Flute Making :
Circumstance of the instrument which had been used in between the Meiji era and
the early Showa era in Japan

丹 下 聡 子

TANGE Satoko

The purpose of this study is to trace the origin of the reason why Koichi Muramatsu started making the Boehm flute. From the Meiji era to the early Showa era, mainly the Mayer flute and the Albert flute were used in Japan. There is no record of the Imperial Household Ministry purchasing any Boehm flute at that time. In 1921, Masao Okamura, a flutist returned from the United States with the Boehm flute. It seemed that Muramatsu had been affected by Okamura's Boehm flute. It is considered that Muramatsu was impressed by the Boehm flute as the flute of most new system in Taisho era, and he started making the Boehm flute in order to disseminate it in Japan.

キーワード：村松孝一、ベーム式フルート、軍楽隊、宮内省式部職

Koichi Muramatsu, Boehm Flute, Military band, Imperial Household Ministry

0. はじめに

村松孝一（1898 - 1960）はムラマツ・フルートの創始者であり、日本で初めて国産のフルートを作った人物である。大正6年（1917）年に陸軍戸山学校へ入校した村松は、そこでトランペットやホルンを担当したが、かなり早い時期に演奏者ではなく楽器製作を志すことを決めた。しかし、楽器製作に関する予備知識を全く持ち合わせていなかった村松は、戸山学校内にある楽器を修理し、楽器を研究することから始めた。そして、大正12（1923）年に陸軍軍楽隊戸山学校を辞め、本格的に楽器製作を開始したのである¹。

本論の目的は、村松がなぜ当時の日本で主に使われていたメイヤー式フルート²やアルバート式フルート³ではなく、まだ日本にほとんど存在していなかったベーム式フルート⁴を製作するに至ったのかを明らかにすることである。戸山学校で修理していた楽器はメイヤー式だったと考えられるが、ベーム式を作り始めた理由について、村松本人の手記にも書かれていない。これまでの洋楽器受容に関する研究の中でフルートに関するものは非常に少ない。たとえば、塚原（1993）と中村

(1993)の研究では、明治期の日本における楽器購入についての経緯が詳細に述べられているが、購入されたフルートの具体的な仕様については明らかにされていない。近藤(2003)は、日本へのフルートの伝来、外国からの演奏家の来日記録、明治期から昭和初期の日本人フルート奏者とその演奏記録について詳細に述べており、村松についても取り上げているが、村松本人の手記をもとにしているためベーム式フルートを作り始めた理由については言及していない。ザ・フルート編集部(1998)による国内のフルートメーカーについての記録についても同様である。そのため本論ではまず、明治期から昭和初期までの国内の楽器の状況について宮内省式部職⁵の『楽器装束管理録』と音楽取調掛の資料をもとに当時の日本で使われていたフルートの仕様について調べていく。次に、その頃発刊された音楽書の中に書かれているフルートの仕様について見ていく。最後に、『日本フルートクラブ月報⁶』から当時の奏者が使用していた楽器についての記述を調べ、その時代にどのような楽器が求められていたのかを記事の中から見出す。

以上の考察から、明治期から昭和初期までの国内で主に使われていたフルートの仕様を精査し、村松がいつベーム式フルートと出会い、それを製作することとしたのかを明らかにしていく。

1. 国内の楽器情况

陸海軍軍楽隊の母体である薩摩藩軍楽伝習隊が横浜で吹奏楽の伝習を始めたのは、明治2(1869)年10月ごろのことであった。初めは楽器がなく、日本の職人が作ったものを使用していた⁷が、翌年6月ごろ、ロンドンより楽器が到着し、本格的な訓練が開始された。ここでは、明治から昭和初期に日本で購入されたフルートの仕様について宮内省式部職、音楽取調掛に残されている購入記録をもとに明らかにしていく。まず、明治3(1870)年にロンドンより到着した楽器から見ていきたい。

1.1. 軍楽隊——ロンドンより到着した楽器

明治3(1870)年6月ごろ、楽器が到着した⁸。これらはイギリスのベッソン社より吹奏楽器ディーラーのディスティン社(Distin & Co. 1862 - 1885)を仲介して注文したものであった。ブラック(1970)で「一楽隊に要する最高級の連隊楽器を一揃え⁹」と述べられているが、その楽器の内訳については明らかにされていない。これについて、国立公文書館等でも資料が見当たらず、今のところ楽器の種類の特定はできていない。そのため、戸楽会¹⁰で昭和62(1987)年に作成された陸軍軍楽隊隊員名簿で担当楽器の内訳を参照した。それによると、当時の軍楽隊員は30名の薩摩藩士(薩摩藩軍楽伝習隊)で、フルート、ピッコロ奏者は飯島太十郎¹¹ただ一人であるのがわかることから、フルートかピッコロだと考えられる。そして軍楽隊沿革史の記録と小山作之助の著書から引用した『音楽五十年史』の資料¹²を見ると飯島の担当楽器について、軍楽隊の記録には「フルートピッコロ」と書かれており、小山の著書には「ヒキロ(ママ)」と書かれている。したがって、飯島はフルートではなくピッコロを演奏していた可能性が高く、ロンドンから届いた楽器もピッコ

口だったのではないかと考えられる。

1.2. 宮内省式部職で購入された楽器

ここではまず、明治8（1875）年1月25日付けで式部職から楽器購入について出された『伶人欧楽伝習ニ付楽器代価御下渡ノ儀伺¹³』をもとに購入された楽器の内容を見ていく¹⁴。次に『楽器装束管理録』の内容を整理し、フルートとピッコロに関する購入内容を見ていきたい。

①『伶人欧楽伝習ニ付楽器代価御下渡ノ儀伺』

明治4（1871）年の宮中改革をきっかけに宮中行事への西洋音楽導入が進められた¹⁵。そのため式部職の伶人が西洋音楽に取り組むことになり、明治7（1874）年から海軍軍楽隊の楽隊屯所に通って楽譜の読み書きを学んだ¹⁶。この上申書は、この伶人たちが使用するための楽器を購入するためのもので、実際に楽器を手にするには明治9（1876）年4月まで待つことになったが、その時の記録がここに残されている。購入された楽器、全35品の内、ピッコロ（in E♭）が1本のみで、フルートの購入記録はなかった¹⁷。

②『楽器装束管理録』

記載内容

全部で10冊ある『楽器装束管理録』は、現在、宮内公文書館に保管されており、明治24（1891）年から昭和11（1936）年までの記録が残されている。洋楽器については3、4、5、6、9冊目に書かれているが、本論ではフルートとピッコロのみを研究対象とする。表1は、その記載内容を一覧にしたものである。

3冊目に明治26（1893）年10月の『欧州楽器目録』が記載され、4冊目には明治24（1891）年の楽器目録を明治30（1897）年に改訂したものが記載されている。5冊目には明治40（1907）年から明治44（1911）年まで、6冊目には大正6（1917）年から昭和11（1936）年までの各楽器の管理記録が残されている。この2冊は、各年末に楽器の本数を確認していたものであり、3冊目から6冊目を整理することでこの時期に式部職にあった楽器の種類がわかる。

9冊目は、明治36（1903）年1月から明治38（1905）年のドイツのヘッケル社との楽器購入に関する往復書簡が残されている。この記録には楽器の仕様についても書かれている。

(表1) 『楽器装束管理録』の記載内容一覧

冊名	目録	記載内容
3	第七号 欧州楽器目録 附属品共 明治二十六年改 附 欧州楽員礼服目録	明治 26 (1893) 年 10 月の楽器目録
4	第一号 欧州楽器目録 明治三十年七月改正	明治 24 (1891) 年の楽器目録を 明治 30 (1897) 年に改訂した目録
5	第一号 欧州楽器備品総目録 (自 明治四十年 至 同四十四年)	明治 40 (1907) 年から明治 44 (1911) 年までの 各楽器の管理記録
6	第一号 欧州楽用器具保管簿 (自 大正六年 至 昭和二十一年)	大正 6 (1917) 年から昭和 11 (1936) 年までの各 楽器の管理記録
9	第一号 欧州楽器類独逸国 ヘッケル楽器会社ヨリ購入二関スル件 (自 明治三十六年一月 至 同三十八年十二月)	明治 36 (1903) 年 1 月から明治 38 (1905) 年の ドイツのヘッケル社との楽器購入に関する往復書簡

楽器目録

表2は、表1の記載内容をもとに明治24(1891)年～昭和11(1936)年の楽器台数を整理し、表にしたものである。対象楽器はピッコロ in C、D \flat 、E \flat 、フルート in C、D \flat 、E \flat の6種類である。数字はその年に確認された楽器の台数で、括弧内の数字はそのうち外部に貸し出されている楽器の数¹⁸、×印は記録のないものを示している。初めは6種類の楽器がほぼ同数であることが確認できるが、ピッコロ、フルートともに in E \flat の楽器はほとんど使われなくなっていくことがわかる。また、in D \flat の楽器についても、最終的には使われなくなり、どちらも in Cの楽器が主流になっていくことが見て取れる¹⁹。

明治37(1904)年ヘッケル社から届いた楽器の仕様について

楽器の仕様についての記録が残されているのは、この時の購入記録のみであった。ピッコロ2本、フルート4本の仕様に関する記述を引用し、表3にまとめた。

第2回の受入時に届いた2本のフルートは、低音Hまで出せるC管の楽器でEとF \sharp 、トリルキーが付いており、吹き口(頭部管)は象牙製である。「精撰機械銀製特別製」というのは鍵の部分が銀製だということだと考えられる。この楽器1本の値段は320マルクで、現金支払いに対し一割引で販売されたことが書かれている。「ピッコロ、フレーテ、イン、チエー」と書かれているのはピッコロのことであろう。象牙の頭部管を持ち、銀メッキで作られたものである。金額は130マルクで、フルートと同様に一割引されている。第3回の受入時に届いたピッコロはD \flat 管で、象牙の頭部管である。金額は第2回のピッコロと同じであった。第5回の受入時はD \flat 管のフルート2本が届いている。この2本のフルートも、第2回の受入時に届いたものとほぼ同じものだったと推察される。

この記録が、楽器の仕様について『楽器装束管理録』の中では一番詳細に書かれている部分である。これだけではメイヤー式なのか、ベーム式なのかは判断できない。しかしながら、ドイツでは

19世紀後半から1930年代頃までメイヤー式が主流であったし、時代は少し先になるが1930年頃にヘッケルがメイヤー式をもとにした改良フルートを製作していた²⁰ことから、これらのフルートがベーム式ではなくメイヤー式のフルートであったと言えるだろう。²¹

（表2）『楽器装束管理録』に記録されている楽器一覧

楽器名		チエー ピッコロ	デス ピッコロ	エス ピッコロ	チエー フレーテ	デス フレーテ	エス フレーテ
英語楽器名		Piccolo in C	Piccolo in D ♭	Piccolo in E ♭	Flute in C	Flute in D ♭	Flute in E ♭
1891	明治24年 7月	1	2	1	3	2 (甲乙)	2 (甲乙)
	明治26年 10月	×	×	×	3	4	2
1897	明治30年 7月(改)	1	2	1	4	2	2 (甲乙)
	明治36年 12月	1 (1)	3 (1)	×	4 (4)	2 (1)	1
1904	明治37年 12月	2 (1) 7/30 (第2回) 受入1	4 (2) 9/10 (第3回) 受入1	×	6 (2) 7/30 (第2回) 受入2	4 (2) 12/29 (第5回) 受入2	1
	明治38年 12月	2 (1)	4 (2)	×	6 (2)	4 (2)	1
1906	明治39年 12月	2 (1)	4 (2)	×	6 (2)	4 (2)	1
1907	明治40年 12月	2 (1)	4 (2)	×	6 (2)	4 (2)	1
1908	明治41年 12月	1 3/19 返納1	1 3/19 返納3	×	3 3/19 返納3	2 3/19 返納2	1
	明治42年 12月	1	1	×	3	2	1
1910	明治43年 12月	1	1	×	4 (2) 9/27 受入1	2	1
	明治44年 1月	1	1	×	4	2	1
1917	大正6年 1月	2	1	×	5	2	1
1924	大正13年 4月	3	×	×	6 4/20 受入1	×	×
	昭和4年 1月	5 1/14 引継2	×	×	8 1/14 引継2	×	×
1930	昭和5年 7月	4 7/24 下附1	×	×	6 7/24 下附1	×	×
	昭和9年 12月	5 12/17 受入1	×	×	8 12/17 受入2 (1つはピッコロ付)	×	×
1936	昭和11年 12月	5	0 12/9 下附1	×	7 12/9 下附1	0 12/9 下附2	0 12/9 下附1

(表3) 明治37(1904)年ヘッケル社から届いた楽器の仕様一覧

到着日時	本数	楽器	楽器の仕様と金額
明治37年7月30日 (第2回)	2	Flute in C	ソロ、フレーテ第21号、低音ハー込及エー、フィス、トリラ完全象牙吹口精撰機械銀製特別製 貳個 右壱個代参百貳拾マーク 貳個合計六百四拾マーク、現金御支払二對シ壱割減六拾四マーク 支拂金高五百七拾六マーク也
明治37年7月30日 (第2回)	1	Piccolo in C	ピッコロ、フレーテ、イン、チエー、自在精撰機械反響器付キ 象牙吹口鍍(めっき)銀特別製 右壱個代百参拾マーク也 現金御支払二對シ壱割減拾参マーク 支拂金高百拾七マーク也
明治37年9月10日 (第3回)	1	Piccolo in D \flat	ピッコロ、イン、デー(デス?) 象牙吹口特製番号三十二甲 壱個 壱個代 百参拾マーク 壱割減 拾参マーク 支拂金高百拾七マーク也
明治37年12月29日 (第5回)	2	Flute in D \flat	ソロ、フレーテ、イン、デス 貳個 低音ハー込、エー、フィス、トリラ機械附、象牙吹口、ガルバニー鍍銀裝飾、現金御支払二對シ壱割引ス 壱個賣代参百貳拾マーク也 普通貳個賣價格 六百四拾マーク也 割引價格 五百七拾六マーク也 支拂高

1.3. 音楽取調掛の楽器購入記録

音楽取調掛での楽器購入記録は『音楽取調掛時代文書綴』の中にある。その楽器購入記録と、現在、東京藝術大学資料館に保管されている楽器を見ていく。

『音楽取調掛時代文書綴』巻5 諸伺書類(明治13<1880>年7月)

第5巻の95から96には「米国ニテ購入楽器(ママ)」として「音楽取調掛ヨリ注文之分」と「メーソン氏ヨリ注文ノ分」があり、後者にフルートの購入記録がある²²。

また、97から99の記録には「トムソン・エンド・ヲデル組ニ於テ楽器ヲ左ノ代價ニテ購求仕候也」と書かれており、ここでは伶人用にフルートが購入されたことがわかる。しかし、フルートの仕様については記録がない。

東京藝術大学資料館に保管されているフルートについて

近藤(2003)では現在も東京藝術大学資料館に残されている3本の楽器について述べられている²³。以下、フルートの仕様に関する引用はこの著書からのものである。

①明治36(1904)年に購入されたドイツ・ヘッケル社製。

「ローズ・ウッドで頭部は象牙。指孔6、鍵11のC管で全長737mmの円錐管」

これは、吹き口(頭部管)は象牙製であること、楽器の長さから低音Hまで出せるC管の楽器であることがわかる。前頁で述べた『楽器装束管理録』の購入記録にある明治37(1904)年ヘッケル社から届いた楽器仕様と一致するため、その楽器だと言えるだろう。また、鍵の数と円錐管であることからバーム式フルートではない。

②明治41(1909)年に購入されたドイツ・ヘッケル社製。

「黒檀で頭部は銀製。指孔5、鍵12のC管で724mm。Heckel Biebrich, No.3161と刻まれている」前の楽器よりも5年後に購入されたものだが、この楽器も12鍵であることや、同じドイツ・ヘッ

ケル社製であるためベーム式フルートではないと考えられる。

③大正 15（1926）年に購入されたドイツ・モーリッツ社製。

「ローズ・ウッドで頭部は象牙²⁴。14 鍵で全長 711 mm。C. W. MORITZ ERLIN PUROPHON と刻まれている。シュヴェドラー式²⁵といわれるもので、管の分割のしかたは現在のものとはほぼ同じである」この楽器ははっきりと「シュヴェドラー式」と解説されているため、ベーム式フルートではない。

軍楽隊、宮内省式部職、音楽取調掛、それぞれの購入記録を見たところ、明治から大正時代のあいだにベーム式フルートは購入されていないことがわかった。では、一般にはこのフルートの仕様についてどのように知られていたのだろうか。次項では当時出版されていた音楽書と使用されていたと考えられる教則本を調べていく。

2. 教則本とフルートの解説がある音楽書

ここでは、大正から昭和初期にかけて出版された音楽書²⁶で、フルートの仕様について書かれているものを調べていく。また、陸軍軍楽隊で使われていた教則本についても考察する²⁷。

2.1. 国内で出版されたもの

表 4 は、大正から昭和 30 年代までに国内で出版され、フルートの仕様について書かれているものの一覧である。村松がフルート作りを始める大正 12（1923）年以前から昭和時代までの音楽書を見て行くことで、徐々にベーム式フルートが一般的になっていったことがわかる。その中でも

（表 4）大正から昭和 30 年代までに国内で出版された教則本と音楽書一覧

著者	発刊年	題名	解説されている楽器	楽器の調性
中山 隆次	大正 5 年 (1916)	簡易音楽体型と楽器沿革	写真のみ (ドイツ式?)	記載なし
瀬戸口藤吉	大正 14 年 (1925)	管絃楽器の取扱法	多鍵式	C、D \flat 、D、E \flat 、F
F. マイエルホッフ	大正 14 年 (1925)	管絃楽器論	ドイツ式、ベーム式	C (D \flat とE \flat は極めてまれ)
伊庭 孝	大正 15 年 (1926)	音楽読本	ベーム式	C
小笠原良造	昭和 4 年 (1929)	現代音楽通論	写真のみ (多鍵式)	記載なし
山口 常光	昭和 10 年 (1935)	ブラスバンド教本	ベーム式、メーアー式	C
	昭和 30 年 (1955)	吹奏楽教本	ベーム式	C
山田 耕筈	昭和 10 年 (1935)	音楽読本	フランス式、ドイツ式、ベーム式	C、D \flat 、E \flat など
紺野 五郎	昭和 12 年 (1937)	小学校青年学校吹奏楽の編成と指導	ベーム式	C
岡村 雅雄	昭和 33 年 (1958)	フルートの学習書 (初級用)	ベーム式	C

山口常光の昭和30(1955)年の著書『吹奏楽教本』は昭和10(1935)年の『プラスバンド教本』の改訂版であり、内容はほとんど同じであるが、改訂版にはベーム式フルートの解説しか書かれていない。これは、昭和初期までは様々な楽器仕様が存在していたが昭和30年代にはベーム式フルートが主流になっていたことを示している。

2.2. 陸軍軍楽隊・ルルーの教育で使用された教則本

明治17(1884)年、陸軍軍楽隊にパリ音楽院出身のシャルル・ルルー Charles Leroux (1851 - 1926)²⁸が着任し、軍楽隊の制度改革と本格的な教育訓練を開始した²⁹。それまで使用していなかった教則本の使用もその改革のひとつであった³⁰。中村(1993)の「ルルー・レポート³¹」には、各種楽器の授業でパリ音楽院の教則本を利用したことが書かれている。また、中村の「ルルーが出發まぎわにフランスで出された一番新しい文献資料をいろいろと入手のうえ、わが国に携えてきたことが知れる³²」という一文から推測すると、フルートのための教則本はアンリ・アルテス Henry Altès (1826 - 1895)の『音楽の完全な理論を含むベーム・システム・フルートのための教本(全3巻) *Méthode pour flûte système Boehm contenant la théorie complète de la musique*』であると考えられる。アルテスは1884年当時、パリ音楽院のフルート科教授をつとめており、この教則本は1880年に出版されている³³。軍楽隊で使用されていた楽器はベーム式フルートではなかったが、このアルテスの教則本を使用していた可能性があるのは非常に興味深い。なぜなら、軍楽隊で使用していたと思われるメイヤー式とベーム式とでは運指等の技術的な問題だけではなく、それぞれの楽器が持つ音に対する考え方が全く違っているからである³⁴。しかし、このことからベーム式フルートの存在は日本でも知られていたということがわかる。

では、実際にベーム式フルートが日本国内に入ってきたのはいつだったのか、そして、どのように受容されていったのかを大正から昭和初期にかけてフルートを吹いていた人たちの手記から見出したい。

3. 国内におけるベーム式フルート受容 —— 『日本フルートクラブ月報』の記事をもとに

昭和23(1948)年1月に創立された「日本フルートクラブ」では昭和26(1951)年9月号を第1号として『日本フルートクラブ月報』を発行している。本項では、その記事の中から村松が楽器を作り始める大正12(1923)年前後に使われていた楽器の仕様について書かれたものを見ていきたい。記事の筆者が所有していた楽器の仕様と年代が特定できるものはJ.O. ガントレットと岡村雅雄のもののみであったため、この二人の記事を取り上げる。また、月報の会員による記事には、しばしば「CやDが出る楽器はほとんどなかった」と書かれていることから、当時、一般に使われていた楽器を調べるとともに、どのような音が求められていたのかということも見て行きたい。

3.1. ジョン・オーエン・ガントレット John Owen Gauntlett (1907 ? - 1988) ³⁵

母は山田耕笹の姉「恒」で、叔父である耕笹からオルガンや作曲を習った。フルートを始めたのは満十六才の春だった。生まれた年は見当たらないが「叔父の山田耕笹が僕のフルートを聴いて始めたばかりの日響³⁶のセカンドフルートが病気だということで引っぱり出されたのが十八才の夏だった。始めて三年目である。」という記述をもとにして考えると明治40（1907）年頃の生まれと推察される³⁷。ガントレットは進駐軍の教育部技術顧問、青山学院大学で英語教師をつとめ、英語に関する著書³⁸もある。「日本フルート協会」設立時（1966年8月）には副会長をつとめた。恒は「(息子は)暇があれば読書をしたりフルートを吹いていた³⁹」と著書の中で回想している。昭和28（1953）年8月に掲載された手記には、それまで彼が使っていた5本の楽器について書かれている。

①最初の楽器：メイヤー式（大正12〈1923〉年頃）

「メイヤー式(ママ)の6ツ鍵の付いた」楽器を持って週に一度、毎週土曜日には戸山学校へフルートを吹きに行っていたが、1年もすると先生に「もう教える事はない」と言われて卒業することになった。その先生の楽器と音についてガントレットは「先生もボエム(ベーム)のフルートを持ちながら下のCやC#は鳴らず、鳴らないのが常識とされている時代だった」と述べている。大正12年頃、戸山学校ではベーム式フルートが使用されていたことが窺えるが、その楽器はメンテナンスされていなかったようだ。しかし、ガントレットのメイヤー式は「叩きつけてしまおうか」と思ったほど鳴らなかったため、中古の楽器を借りるようになった。それが2本目の楽器となる。

②2本目の楽器：D♭管、ベーム式（大正12〈1923〉年から大正13〈1924〉年頃）

「ブッフェクランポン(ママ)の半音高い穴あきの中古」を(音程を)無理に下げて吹いていた。ガントレット本人はベーム式と書いていないが、メイヤー式では「どうにもならない」と述べていることからベーム式フルートを吹いていたと考えられる。また、ビュッフエ・クランポンでは1840年代にはベーム式フルートを製作していたことが1844年と1849年のパリ博覧会への楽器出品記録からわかっている⁴⁰。

③3本目の楽器：ベーム式（大正14〈1925〉年頃）

「十八才のクリスマスには借り物のボエムを震災で困っている楽器屋に同情して(父が)買ってくれた」というこの楽器は「アメリカのフルートで口を直したら低音が素晴らしく鳴った」ようだ。しかし、残念なことにこの楽器は戦災で焼けてしまった。

④4本目の楽器：ベーム式（昭和23〈1948〉年）

この楽器は「戦後三年目にやっと手に入れた村松氏のフルート」であった。村松は50歳の年である。1940年にはひと月に70から80本を作製するまでになっていたが、1943年以降の金属統

制令下では手持ちの材料で製作を続けていた⁴¹。ガントレットがこの時だけ特別に「その（手に入れた）時の嬉しさは忘れられない」と述べているように、いかに貴重なものだったかがわかる。

⑤ 5 本目の楽器：ベーム式（昭和 28 <1953> 年）

手記を書いたときに吹いていたのは「アメリカ製のセルマーである」。

以上、ガントレットが吹いていた 5 本の楽器から村松が楽器を作り始めたころにはまだメイヤー式も一般に使われていたことがわかる。しかしながら「メイヤー式は鳴らない」と考え、2 本目の楽器は無理やり低く吹かなければいけない D ♭ 管の楽器であってもベーム式を手に入れたかったということが見て取れる。では、なぜベーム式を吹きたいと考えたのか。日本で初めてベーム式フルートを吹いたという岡村雅雄の記事を見て行く。

3.2. 岡村雅雄（1892 - 1961）⁴²

村松の手記の中に「岡村雅雄氏が米國から帰ってフリュートを吹いたのを聞いて C の音が聞えたといって騒いだものだ⁴³」（原文ママ）という一文があり、そのことで「専門家ではなかったのだが、俄然（岡村が）日本一のフリュート吹きになってしまった」と述べている。岡村は、東京府立第四中学校を卒業した後、明治 41 年にアメリカに渡り、南カリフォルニア大学経済学部を卒業した。その後 5 年ほど新聞記者をつとめたが、大正 10（1921）年の暮に帰国した⁴⁴。その時「僕が持って来たのは勿論ベーム式ヘインズ社製銀管 C # 鍵もついて居た」のだが岡村は、この頃、日本ではメイヤー式とかアルバート式のフルートを吹いている人がほとんどであったと回想している。「何処へ仕事へ行っても先づフルートを見せて呉れと云われた」のは、低音をたっぷり鳴らすことができたからである。当時の奏者たちが実際にシステムの異なる楽器を目の前にし、その音を聴いた時、ベーム式フルートならば豊かな低音を鳴らすことができると考えるのは当然のことであろう。

岡村はベーム式フルートを演奏するだけではなく『日本フルートクラブ月報』にテオバルト・ベーム著「ボエム式（ママ）フルートと其の演奏」の日本語訳を連載し、ベーム式フルートを日本に普及させることにも貢献した⁴⁵。前述した村松の手記にあるように、低音を出すことができた岡村の演奏と彼のベーム式フルートから村松が影響を受け、ベーム式フルートを作り始めたことは間違いないであろう。

4. おわりに

日本での軍楽隊設立後、明治期に日本に入ってきたフルートはベーム式ではなかったが、大正から昭和初期に発刊された音楽書にはメイヤー式などの多鍵式フルートについての解説のほかにはベーム式フルートの解説があった。また、陸軍軍楽隊ではアルテスの教則本が使用されていたため、そ

の存在は知られていたと考えられる。岡村の大正10（1921）年にアメリカから帰国したときに持ち帰ったベーム式フルートでの演奏は、村松がフルート製作を始めるにあたり、少なからず影響を与えたに違いない。プロの奏者ではないにもかかわらず、低音のC、Dを豊かに出すことができたのは楽器の力が大きいと考えたであろう。

村松自身は当時主流だったメイヤー式フルートではなく、ベーム式フルートを作り始めた理由を書き残していないが、手記の中で「私は音楽を愛し、音楽を純粋に楽しむ人のために多くの楽器を作って贈ろうと考えた⁴⁶」と述べている。村松は、岡村が帰国したときに持っていたベーム式フルートが、大正時代の日本国内における最先端の楽器と考え、それを普及させるために尽力すべくベーム式フルートを作り始めたのだろう。

・本稿執筆にあたり『日本フルートクラブ』の月報No.0～69までを提供して下さった比田井裕氏に感謝いたします。

主要参考文献

- Powell, Ardal 2002 『*The Flute*』 Yale University Press.
- 鶴沢尚信 1969 『陸軍戸山学校略史』 非売品。
- ガントレット恒 1949 『七十七年の想ひ出』 植村書店。
- 近藤滋郎 2003 『日本フルート物語』 東京：音楽之友社。
- ザ・フルート編集部編 1998 『国産フルート物語』 東京：アルソ出版。
- ジャンニーニ, トウーラ 2007 『フランスの偉大なフルート製作家たち・ロット一族とゴドフロー一族 1650年～1900年』 堀江英一訳、有田正広監修、London: Tony Bingham。
- 丹下聡子 2013 『アルテスのフルート教本再考——導音の奏法に見る19世紀の美意識——』 愛知県立芸術大学博士論文(第12号)。
- 塚原康子 1993 『十九世紀の日本における西洋音楽受容』 東京：多賀出版。
- . 2001 『第3章 軍楽隊と戦前の大衆音楽』 『プラスバンドの社会史——軍楽隊から歌伴へ』 阿部勘一他著、東京：青弓社。
- 戸楽会 1987 『陸軍軍楽隊員名簿』 非売品。
- 戸ノ下達也編著 2013 『日本の吹奏楽史——1869-2000』 東京：青弓社。
- トフ, ナンシー 1980 『現代フルートのあゆみ——フルートは いま』 みつとみ としろう訳、東京：音楽之友社。
- 中村理平 1993 『洋楽導入者の軌跡——日本近代洋楽史序説』 東京：刀水書房。
- ブラック, J.R. 1970 『ヤング・ジャパン——横浜と江戸(全3巻)』 ねず・まさし他訳、東京：平凡社。
- ペインズ, アンソニー 1965 『木管楽器とその歴史』 奥田恵二訳、東京：音楽之友社。
- 堀内敬三 1942 『音楽五十年史』 東京：鱗書房。
- 前田りり子 2006 『フルートの肖像——その歴史の変遷』 東京：東京書籍。
- 村松孝一 2010 『礎 没後五十年・メモリアル』 埼玉：株式会社村松フルート製作所。
- 吉田雅夫 1980 『フルートと私』 対談：植村泰一、東京：シンフォニア。
- ・フルートの解説がある音楽書(教則本を含む)
- 伊庭孝 1926 『音楽文化叢書 第1篇 音楽讀本』 文化生活研究会。
- 小笠原良造 1929 『現代音楽通論』 広文堂書店。
- 岡村雅雄 1958 『フルートの学習書(初級用)』 龍吟社。
- 紺野五郎 1937 『小学校青年学校吹奏楽の編成と指導』 東京：管樂研究會。
- 瀬戸口藤吉 1925 『管絃楽器の取扱法』 大阪開成館館版。
- 中山隆次 1916 『簡易音楽体型と楽器沿革』 共益商社書店。
- マイエルホッフ, フランツ 1925 『管絃楽器論』 信時潔、片山頤太郎訳、東京：高井楽器店。
- 山口常光 1935 『プラスバンド教本』 東京：管樂研究會。
- . 1955 『吹奏楽教本』 東京：音楽之友社。
- 山田耕筰 1935 『音楽讀本』 日本評論社。
- ・宮内公文書館資料
- 『楽器装束管理録』 識別番号 11304-1～10。
- ・国立公文書館資料
- 『伶人吹奏伝習二付楽器代価御下渡ノ儀伺』 請求番号 本館-2A-009-00・公 01392100。
- ・月報
- 『日本フルートクラブ月報』 No.0～No.69 (1949年～1957年)
- ・東京芸術大学貴重資料データベース資料
- 『音楽取調掛時代文書綴 巻5 諸同書類(明治13年7月)』 93 米国にて購入楽器代価仕訳書につきメーソンへ紹介、会計局へ通知およびメーソンより解答(仕訳書つき)。

参考ホームページ

- 『一般社団法人 日本フルート協会』 <http://japan-flutists.org/> (アクセス日 2015 年 10 月 10 日)。
 『宮内庁』 <http://www.kunaicho.go.jp/> (アクセス日 2015 年 10 月 30 日)。
 『国際結婚の楔となったガントレット恒子の生涯』 <http://www.japanjournals.com/2011-01-14-15-46-57/survivor/1085-2011-03-21-12-00-10.html> (アクセス日 2015 年 9 月 20 日)。
 『東京藝術大学大学美術館収蔵品データベース』 <http://jmapps.ne.jp/geidai/index.html> (アクセス日 2015 年 10 月 17 日)。
 『日本フルートクラブ出版』 <http://www.jfc-pub.co.jp/index.htm> (アクセス日 2015 年 10 月 10 日)。
 『ビュッフェ・克蘭ポン Buffet Crampon』 <http://www.buffet-crampon.com/jp> (アクセス日 2015 年 10 月 10 日)。

註

- 1 楽器の中でもフルートを選んだ理由は本人の手記にも書かれていないが、ザ・フルート編集部による『国産フルート物語』には「フルートが一番やりやすかった」p.25、「フルートを作り始めたのは需要が他の楽器より多かったから」p.209 ということが書かれている。
- 2 木製円錐管の楽器で、19 世紀に「普通のフルート」と呼ばれた多鍵式フルートとほぼ同じ構造を持つ楽器である。トフは「ベームの 1832 年モデルと実際的に区別し難い」と述べている (トフ 1980: 113)。
- 3 吉田雅夫 (1915 - 2003) は、中学 3 年の時に最初に吹いた楽器がアルバート式のピッコロであったと述べている。そこではアルバート式について「現在のベーム式フルートになる前の旧式のシステム」と書かれている (吉田 1980: 17)。
- 4 テオバルト・ベーム (Theobald Böhm 1794-1881) が開発し、1847 年に特許を得た金属製円筒管の楽器である。円筒管にすることで円錐管の楽器に比べて低音域が豊かに響く。本論ではこの 1847 年型を「ベーム式フルート」と呼ぶこととする。
- 5 現在は「宮内庁」であるが、本論の研究対象とした明治から昭和初期までは「宮内省」であったため、本論では「宮内省」としている。式部職は宮内省の儀式に関することを担当し、雅楽・洋楽は楽部が担当している。
- 6 日本フルートクラブは、岡村雅雄を会長、松井、岡本、その後主宰者となる比田井洵らを世話人とし、会員 30 名ほどで設立された。創刊号は昭和 24 (1949) 年 4 月に発刊されており、そこに「昨年 1 月にクラブ創設」の旨が書かれているが、『日本フルートクラブ出版』ホームページによると昭和 22 (1947) 年頃結成されたこととある。今回は、日本フルートクラブ出版代表取締役比田井裕氏のご厚意により創刊号から第 69 号 (1957 年 8 月) までのデータをご提供いただいた。
- 7 「すでに西洋式に作った日本製の横笛、ラッパ、太鼓などで始めていた」(ブラック 3 巻 1970: 122)。
- 8 堀内 1942: 9、中村 1993: 78 - 79 ほか。
- 9 ブラック 3 巻 (1970: 122)。またブラックは、7 月 31 日に藩主がロンドンから帰った際に楽器を持ち帰ったと述べている。
- 10 陸軍軍楽隊戸山学校出身者による団体である。
- 11 のちに名前を國廣と改めている (近藤 2002: 25)。
- 12 堀内 1942: 10。
- 13 国立公文書館資料: 請求番号 本館 -2A-009-00・公 01392100。
- 14 楽器購入の過程については塚原の著書で詳しく述べられている (塚原 1993: 235)。
- 15 塚原 1993: 118。
- 16 塚原 1993: 234。
- 17 ピッコロについては「イーフラットピッコロス ーツ ニホント 九円五拾銭」と記述されている。
- 18 貸出先は記載されていない。
- 19 表 2 の中の数字以外記載について以下の通りである。甲乙: 明治 24 (1891) 年と明治 30 (1897) 年のフルート in D ♭ と E ♭ には「甲乙」と記載があった。これは、2 本のフルートにそれぞれ番号が付けられていたものと思われる。受入と返納: 明治 37 (1904) 年の受入は、前年にドイツのヘッケル社に注文した楽器が 5 回に分けて到着したことが記録されている。ピッコロとフルートは第 2、第 3、第 5 回の到着分に記録があった。明治 43 (1910) 年、大正 13 (1924) 年、昭和 9 (1934) 年の受入、明治 41 (1908) 年の返納については特記されていなかった。引継: 昭和 4 (1929) 年「大禮使ヨリ」引継と記録されている。下附: 昭和 5 (1930) 年「何済上少年團日本聯盟」へ下附、昭和 11 (1936) 年「何済上學習院輔仁會科」へ下附と記録されている。
- 20 トフ 1980: 93。
- 21 トフ (1980: 93 - 95)、前田 (2006: 278 - 279) は、ドイツで 1930 年代までメイヤー式フルートが主流であったことについて述べている。

- 22 「一 米金 貳拾弗 フルート 壹個」と記述されている。
- 23 近藤 2003 : 89。
- 24 東京藝術大学大学美術管収蔵品データベースによると頭部金属と書かれている。
- 25 最初のモデルのデザインは、ライプツィヒのフルート奏者、シュヴェドラー (Maximilian Schwedler) によって 1885 年頃考案された。その後、息子と共同で作られた「シュベドラー・クルスペ」フルートは 1895 年に特許を得た (トフ 1980 : 91 - 95、Powell 2002 : 198)。トフは「シュヴェットラー」としているが、近藤の表記に合わせて「シュヴェドラー」とした。
- 26 国立国会図書館で確認できた書物のみを研究対象とした。
- 27 音楽取調掛での記録「来 14 年度中音楽取調掛需要の外国品見積書」の中に「一、フルート ラスセル氏著 貳冊 此代償同 貳時令 (シルリン) 六邊尼 (ペンニ)」というものが残されているが、今のところの教則本なのか特定できていないため、これは対象外とする。
- 28 ルルーは 1870 年 19 歳 5 か月でパリ音楽院に入学した。専攻はピアノで、教師はマルモンテルだったと考えられる。卒業の記録はない (中村 1993 : 634 - 636、ルルー略年表より)。
- 29 鶴沢 1969 : 104、塚原 2001 : 93 など。着任期間は明治 17 (1884) 年から明治 22 (1889) 年までであった。
- 30 ルルーの前任、ダグロン (Gustave Charles Dagron 1845 - 没年不明) は教則本などを使用した形跡はない (中村 1993 : 567)。
- 31 中村 1993 : 769 - 774。
- 32 中村 1993 : 570。
- 33 教授在任期間は 1868 年から 1893 年までであった (丹下 2013 : 2)。
- 34 ベームはそれまでの多鍵式フルートよりも音量を増大させ、音程を平均律にするために音響学の研究をもとに楽器を作った (丹下 2013 : 11)。
- 35 『日本フルートクラブ月報』No.24、1953 年 8 月の「寝言」の記事を参照する。
- 36 日本交響楽協会は 1925 年 3 月に山田耕筰と近衛秀麿によって設立された (近藤 2003 : 135)。
- 37 没年は日本フルート協会の事務局に問い合わせた判明した。
- 38 J.O.Gountlett, T.Ohtomo 1958 『文法解説 標準英語作文』東京 : 大学書林など。
- 39 ガントレット 1949 : 60。
- 40 パリ博覧会への楽器出品記録 (ジャンニーニ 1993 : 256, 258)。Powell (2002 : 200) にはフランスのフルート奏者 Rbert Frisch (b. ca1804) が 1840 年にはリュッフェ・クランボンのベーム式フルートを吹いていたと書かれている。
- 41 村松 2010 の年表より。
- 42 『日本フルートクラブ月報』No.46、1955 年 6、7 月合併号の「フルート草分けの時代の話」を参照する。
- 43 『日本フルートクラブ月報』No.10、1952 年 6 月の「笛作り三十年 (二)」より。
- 44 近藤 2002 : 133。
- 45 『日本フルートクラブ月報』第 2 号から第 21 号に掲載している。
- 46 『日本フルートクラブ月報』No.9、1952 年 5 月の「笛作り三十年 (一)」より。